

せたかむい

発行 古平町史編纂室
古平町文化会館 842-2590
第157号・平成14年10月1日

年表で読む

古平の歴史

《63》

タラ漁

■タラ漁に出漁

明治八年の『日本物産字引』には、「鰯は、岩内、古平、積丹、与市、高島にて多く漁す」とあり、タラは古平の主要な産物の一つであったことがわかります。

また明治三六年の記録では、「(明治三二年産) 鰯釣り川崎船四十三隻アリ、ソノ漁獲二百三十石余(一七二トシ余リ)リナリ」と、あります。

■報告書に見るタラ漁

明治三三年、北海道の歴史についての研究では大変有名な河井常吉が、北海道について調査した報告書のうち『後志国状況

報文』で、次のような報告をしています。

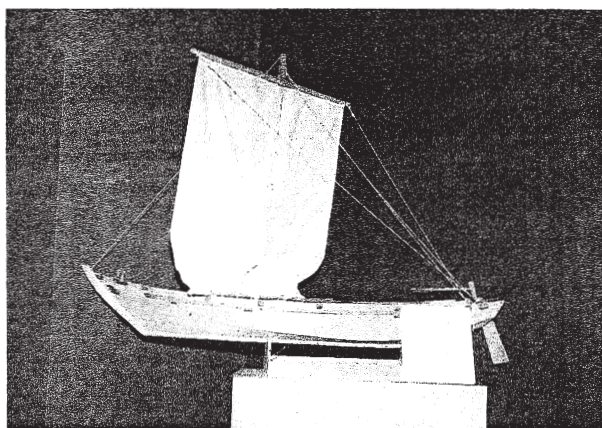
「鰯釣り用の川崎船が四十三隻あつて、その漁獲量は二百二十石余りである。……鰯釣りは一隻の船に七人の漁夫が乗り、親方と称する人から資本を借り、米・みそなど一切の仕込みを受ける。漁獲物は十人に分割し、船や漁具に対して一人分、資本主に二人分、漁夫には七人分を配当する。一隻の船が七百束(一万四千尾・一束二〇尾)を漁獲すると、それでどうやら生活を支えることができる。」とあります。

■古平でのタラ漁

古平のタラ漁は、山形・新潟方面から漁夫が川崎船に乗って

出稼ぎに来ていました。秋、船に漁具や食料品などを積み好天の頃を見計らつてやつて来て、番屋や干場を借りて漁をしていました。自力でやれる人は少なく、多くは海産業者である「正藤沢商店・七山崎商店・困本間商店」などから漁期中の仕込みを受け、漁獲物で清算をしていました。

△帆走することもできて、タラ釣りに使用された川崎船の模型▽
留萌市・海のふるさと館展示品



延縄(はまな)は本州から麻を買つて来て、それをなつて(綱つて燃る)幹縄や枝糸(ヤメ)を作り、一日で延縄のザル一枚分、八一尋(マ・約二二三メートル、尋は五尺二約一五メートル)の幹縄をなえると一人前と言われた。釣針は針金で作られ、先にヤスリをかけて作った。一ザルに釣針を四一本つけ、一隻の船でこのザルを六〇枚から七〇枚を持って出漁しました。

漁は毎年一〇月一〇日から、翌年の五月一五日まで行われていました。

■タラの加工

安永九年といいますが、今から二二〇年程前ですが、その頃の記録に「タラ油を生産した」とあります。それから二〇年程後になって「干タラ」を製造したことが記録にあります。

古平では、タラは塩蔵と乾物に加工し製品として出荷することが多く、明治になってからタラ肝油の製造も行われていました。

・塩蔵Ⅱ頭を切り落とし、腹を裂かず内蔵を取り出して中に

塩を入れ、一〇尾程をむしろ(筵)にくるんで主として東京方面に出荷していました。

・棒タラⅡ頭や背骨、内蔵を切り取つてなや(納屋・架)に掛け乾燥する。棒タラは二〇尾を一束、八束を一棚(三才)として、敦賀・直江津・伏木方面へ多く出荷していました。この棒タラは、京都周辺では独特の料理の食材として利用されていました。

・開きタラⅡ頭を切り落とし、背割りにして塩蔵する。これを乾燥して大阪に出荷し、そこから朝鮮や支那(中国)方面に輸出されていました。

■タラ肝油の製造

本道でも、タラ漁が盛んになつてくると棒タラや開タラに製造していましたが、肝油はただ捨てられていました。明治の始め頃、函館の人が茅部郡で初めて肝油の製造をしました。明治一〇年、開拓使も茅部郡で肝油を試験的に製造しましたが、明治一五年になつてこれを民営にしました。

後志では明治一一年、祝津村

で開拓使からの補助を受けて肝油の製造が行われました。

古平では明治一六年、戸沢惟充が肝油製造を始め、この年に一五石(二七キログラム)、翌一七年には五六石(約一〇キログラム)を生産していました。

そして明治一八年、小樽で開催された水産物品評会では三等賞に入賞し、同年、根室での北海道物産共進会では二等賞に入賞して、次のような賞詞を受けました。

鰹 肝 油

品位精良にして最も薬用に
適し産額殊に多し其芳洵に
嘉賞すべし

札幌県後志国古平郡浜町

戸沢 惟 充

明治一九年、石川県川北郡から移住して来た寿原要太郎は、翌明治二〇年からタラ肝油製造を始め、明治一九年には積丹郡日司村にも工場を建て、合わせて百万斤(六〇トン)を生産したとあります。

さらに明治二〇年になると、港町に中村栄太郎が肝油工場を建て、明治三年には次のよう

な生産額でした。

中村栄太郎 八、五〇〇円

寿原要太郎 一、〇〇〇円

古平産の肝油は内国博覧会で三等賞に、全道共進会では一等賞に入賞して、その品質の優秀であることが認められ、製造した肝油は、医薬品の原料として東京へ送られていました。

■大正時代の肝油製造

タラの肝油製造と共に、大正時代の末から大量に漁獲されるようになった、スケトウダラからの肝油製造も行われるようになりました。

岩内から来た大樽玉造が、港町の石塚辰蔵や大西勇次郎等に製法を教えたといえます。この二人は共同で港町に肝油工場を新設し、鰹がまで煮た肝臓を、練しめ粕を製造するときの角胴を使って油をしぼり、それを精製して肝油を製造していました。製品は小樽に出荷し、後に商品名・ネオ肝油の原料として使われていました。

その後、スケトウダラの漁獲が増えてきて処理が間に合わなくなり、本間権平、高橋民蔵・

野村猪三郎・田附太吉等を加えて、共同でチョベタン川沿いに古平製油所を新設しました。

そして昭和七年、スケトウダラの発展性とその盛業ぶりを見て、稚内の岡村製油工場が港町の古平木工場跡に肝油工場を新設し、ボイラーを利用して粗製肝油を大量に製造するようになりました。

また、肝油製造のしぼり粕は、当時、町内で広く栽培されていたリンゴの肥料として利用されていました。

■生産物の税金

明治六年、開拓使は乾タラからは現物で二割、タラ油からは一定の税金を徴収していて、明治一六年からは、大型川崎船一隻に付き、乾タラ一束二貫五〇〇匁(約九・四キ)のもの六〇束、外にタラ油四斗(七二リットル)、中型川崎船以下は一隻に付き四〇束、タラ油二斗六升余(四七リットル余)を徴収した外に、乾タラ全体の二割を現物として徴収していましたが、これはかなり高い税率でした。

—— 続く ——

〈大正一〇年〉

9/8 快晴。天高く馬肥ゆるの氣候だ。今日正午から、小樽高商大西教授の講演会がある。『不景氣の研究』と題して大いに得るところがある。向かいの電灯会社事務所では土台工事にかかっている。刺網綿糸類暴騰の評判がたっているせいか問い合わせがある。

9/10 夜は丹前に布団がいくるようになり、蚊帳(かまど)は必要なくなった。昨日△(沢江村仲谷)大謀で清内に建て込みした小マグロが三、四〇尾獲れたという。今日も四〇貫もあるのが一〇尾獲れたというから大漁だ。

9/11 起床六時、浜辺を散歩する。『正大謀で今日型入れ、聞けば婦美大謀では昨日ブリ千尾余りも獲れたとのこと。今日は電灯会社の事務所の建前だ。思ったより建物は小さかった。午後、恵比須神社の祭礼について相談がある。余興として芸者踊りをやることにした。

9/12 起床六時、海岸を散歩したが眺めの良いこと古平の

一等地だ。学校敷地の方を廻ったが、裏山の方を崩して低いところを埋めている。美国町の長谷川、入船町の渡辺さんへカレ網四千間売る。二〇〇円余りになる。薄利多売主義が何よりだ。町内の某店では仕入れを控えていたので品切れだという。これから仕入れると九円以上になるから、売値は安くとも九円五〇

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【58】

銭くらいいなるだろう。店にはまだ七千間程あるので、これらの商売はいよいよ有利になってきた。

9/13 午前九時から役場で、農会主催のリング栽培組合設立の協議がある。いろいろと協議し一一時頃終わる。午後三時過ぎ鶴間君と二人で、スキナイの畑へ遊びかたがた見に行く。暑からず寒からずのちょうどよい天気だ。落葉松も大きくなり草刈りをせねばならぬ。あちこち見回ったがよい運動にな

った。水田を見たが稲はよく実っているようだ。

9/15 朝早く海岸を歩いてみる。△大謀は昨日も大漁だったとのこと。今日また二千円余りも獲ったようだ。『正大謀、今日から建て込みをした。学校の裏では馬車が二〇台余りで土を運び地均しをしている。』

9/19 今日は恵比須神社の

夜宮祭と、山の神さんの遷宮式がある。七時頃山の神さんまで迎えに行く。ずいぶん賑やかでお祭りのようだ。山の神さんから行列をして、西の宮(恵比須神社)に着く。夜は境内で芸者たちの手踊りがあり、見物人も大勢集まる。

9/23 風が激しく吹き海は大荒れ。風も寒く秋の景色になった。彼岸の中日で父と妻は寺参りに行く。私は雨の後なので風間君らとキノコ取りに行く。田に寄ったらキノコはまだ出て

いないということだが、せっかく来たのだからと支店の水車小屋の辺りから山に入る。なる程少しも無い。やぶから出たところで山ぶどうが沢山なっている。大喜びで取ったが籠に一杯あった。味も格別でおいしかった。あちこち廻り五時頃帰った。ずいぶんおもしろかった。来年もまた行ってみよう。

9/24 新聞によれば、四日市や富山地方で大暴風雨で大きな被害が出たとのこと。海岸を散歩したが秋の海も景色がよい。学校敷地の方を廻って七時頃帰り朝食をとる。手持ちの刺網九円五〇銭で売り出したが、今は原価が九円二〇銭にもなっている。原価で売ると同じ値で売っていることになる。一日中雨が降ったり止んだりで秋空だ。

9/29 海は大時化、大謀も波で破損があったというので、土俵や網をこしらえるのに忙しい。早朝からアバや綿糸の注文がある。新聞によると安田銀行頭取の安田善次郎が大磯の別邸で、弁護士風間某に刺殺されたとして出ている。加害者も自殺した

というが、金銭上のもつれが原因という。

10/1 先年、小川から買った畑地の番地が違っているのので二人で登記所へ行き、登記の手続きをする。訂正が出来てこれで安心した。△大謀で小マクロ二千尾余り獲れたという。一尾三円としても六千余円の大々漁で景気もよろしい。

10/2 早起きし、海辺や町中を散歩するのはとても気持ちがいい。海はナギているが天気は定まらない。△大謀からロープ、美国井原大謀からミゴ縄一〇〇把、△大謀からもロープの問い合わせがある。大謀は薄利でもまとまって大量に出るのでおもしろい。大いに太漁して、来年もこの売れ行きを続けたい。綿糸類の値上がりが続く。

10/4 綿糸暴騰という評判を聞いてか、網を買う客がくる。一、七〇〇間程売る。午後、入船町を廻り大謀に寄ってみる。網や綿糸など大した量だ。これらをみんな売り込めるようになったら大きな商売になるだろう。ミゴ縄やアバ縄の需要も大したものだ。来年はミゴ縄を勉強し

て売らねばならぬ。

10/14 昨日は余市山道を歩いて来た。天気は好く周囲の景色もまたよし。荷物が無いので心の向くままあちこち眺めながら、遠足にでも行ったような気分である。湯内の山科さんへ三時頃着いたが、ご飯にアワビ、すじ子のご馳走であった。帰ってから留守中の書面の整理をする。△(へ)正大謀からロープ、大網の注文がある。大謀が盛んになることは店にとっても実に好都合で、今後のこともありこれは大いに勉強せねばならぬ。夜、部落会の役員会があり、会費のこと、街灯の取り付けについて協議する。

10/15 先月末からカレ網の時期になったが、昨年と違い確かに売れ行きは良く予想外だ。手持ち二万間、外一万五千間買いつけたが不足する程の売れ行きだ。商売は先を見越す先見の明がなければ駄目だが、これが確実と思ったら、多少大胆な思い切ったこともやらねばならぬことがある。いつも平凡では平凡な成績しか挙げられぬものだ。この日宝海寺で、大法要と鐘の

撞き初め式があるので行く。稚児さんなども沢山出て境内は賑やかだ。夜は十四日の名月が輝きよい夜だ。

10/16 快晴。浜に出て見ると大謀起こしの船が出ている。今日は在郷軍人会の射撃会を兼ねて秋の行楽会があるというので、五、六〇人の一行が泥の木方面へ出発した。私も行きかけたが大謀の仕事で忙しく残念ながら行けなかった。カレ網鯨網の客も来た。向かいの電気会社事務所の仕事も終わって、建具や畳を入れている。建て上げは低いハイカラな建物だ。佐渡から栗、柿を送って来たが荷造りが不完全で、栗は箱の半分程しか入ってなかった。

10/17 朝夕は寒くなった。まだ水が凍る程ではないが、これからはだんだん寒い日が多くなるだろう。電灯取り付けの工夫が来て、外灯共七か所の取り付けをした。信用組合事務所の建前がある。立派な建物で町的美観を増したようだ。

10/18 午後一時から学校で大町桂月の講演会があり行く。文章の大家であるが、意外に話

は訥弁(とつべん)な人であった。三時に終わる。

10/20 朝夕の寒いこと、こたつが欲しいような日だ。昨日の大雨も今日はすっかり晴れ上がった。座敷の壁塗りも終わり、床の間などの塗師が今日で五日間も来ている。このあと欄間畳が新しくなれば立派な座敷になるだろう。ことに二階は海も見え、日光も申し分なく上等な座敷だ。商売に精を出して、床の間飾りや掛け軸でも掛けるようにしなければならぬ。夜、斉藤権太老人の通夜に行く。たった一日休んだきりで亡くなったとのこと。八三歳とは大往生でめでたいくらいだ。

10/23 朝夕は寒く日も短くなった。寒さも少し和らいだようなので風に吹かれて朝の散歩をする。散歩は実に心身の良薬だ。帰ってから朝食、気もはれはれる。昼ころ野塚から客が来て刺網三〇〇間が現金で出る。美国町では改良網の売れ行きが良いとのこと。余市(あま)というところからアバ縄の注文があり、新しい客だが早速保木回酒店から送る。(続く)

あれから幾歲月か 感動の史跡めぐり

大澤 文子

お盆の精霊送りもすみホット
一息つく頃、残り少ない晩夏を
謳歌しなくては……と、水見喜
多利氏のご指示をいただき、ひ
と町内の史跡めぐりを計画し
た。まず文化会館前を出発。

古平小学校庭に昭和二十九年
建立されたという高野素十のか
たえに立った。

ふるさとを同じうしたる

秋天下 素十

樹立ちの中にピラミット形の石
に刻まれた句碑である。樹影の
元にしゃがみ幾度も口ずさんで
みた。

山葡萄もみじりはえきては
みる蝦夷のくにはらにしきを
なせり

禅源寺境内にひっそりと建っ
ている今中素友画伯の筆塚であ
る。福岡生まれの日本画家。古
平を第二の故郷とし、日頃愛用
の画筆を数本埋め筆塚にしたと
いう。かたえの沙羅樹の花が美

しく一目をひく。そと手を触
れてみた。

蝦夷の古都古平浜の盆の月
やはり禅源寺境内にある野村
泊月の句碑である。草生のなか
にひっそりと建っていた。

『シコロの碑』、これは港町蔵
島神社境内に建てられたもの。
明治四十五年、利尻島方面の漁
場に向かう途中大時化にあった
汽船を、船のマストと陸のシコ
ロの大樹にロープをはり、籠を
使って助けあげたといわれる。
そのシコロの大樹に感謝の心を
こめた佐藤亀治氏が碑を建立さ
れたという。心暖まる謂れにし
ばし頭を垂れる。

魚歌 ふるさとは

波にうたる、月夜かな

かの有名な吉田一穂の詩碑で
ある。また一穂の鎮魂歌碑は昭
和四十一年、琴平神社境内の小
高い一角に建てられている。裏
面には日露戦争以後の本町関係

戦死者の氏名が刻まれている。
私は汗ばむ程の太陽の中、ゆ
っくり参道をのぼって行つた。
唐突に異様な物音と共にカラス
の一群が飛びたつていった。一
瞬、足を止めた。左方の崖には
うつそうと樹々が茂り、参道を
覆うかに枝をのばしている。

ふと、かすかなせせらぎの音
を感じそつと見まわす。うす紫
の姫女苑と沢おぐるまの黄にお
おわれた小川のせせらぎを見つ
けた。ああここにも「小さな秋
が……」フーツと心に安らぎを
感じた。みそそばの花が参道ま
ではびこり可憐で美しい。

やっと鎮魂歌碑の前に立つ
た。深々と頭べをたれそつと碑
の文字をなぞつてみた。晩夏の
陽なのに碑面はつめたかった。

浜霧たちまち並び鯉群来

港町の海沿いに建立された水
見喜多利氏父子の句碑である。
朝に夕にやさしく吹きすぐる海
風に思いをはせ、この地に建て
られたのであろう。

うす桃色のコスモスが、一輪夕
風に揺れていた。

『禅源寺五百羅漢』、また寺院
内に高々と掲げられた伊賀画伯

の作。何か彷彿とさせられるす
ばらしい作品で、見学者も多い
と聞く。

樹林の中にひっそりと建つ
一穂の墓『白林虚籟一穂居士』
と、碑面に書かれた文字が白々
とうかぶ。誰が手向けたのかう
す紫の野菊が一本、かすかに揺
れていた。

『魚霊碑』は魚の供養に建てら
れたという。

古平を賄う滝の水ここに
浄水場の一角に建てられた水見
句丈句碑である。うすねずみ色
の碑面がさわやかな晩夏の陽に
映えていた。

照りつける太陽はジリジリと
頬にやけつく。足の運びもたど
きなく口の渇きを覚えた。ふと
バッグの中から手さぐりでコー
ヒーの小缶を取り出す。貴重な
町内の史跡めぐりは完了。

ひめすいばスズメノカタビラ
などなどと調べし辞典の
野の草を追う

碑のかたえに伸びていた、名知
らぬ草の名も調べていつて
「よかったなあ」と、疲れ
も忘れフーツとつぶやく、
わ・た・し……

古平いろはうつた

来ぬ人を待ち続けろ

セタカムイ

■奇岩・セタカムイ

余市から古平に向かう海岸道路に出ると、絶壁に対比するよう海上に立つローソク岩が目に入ります。それからいくつものトンネルを抜けると、古平湾を抱く丸山の前景のように、セタカムイ岬が見えてきます。その先端にあつて、天を突き刺すようにどっしりと立っている特徴のある岩、これが伝説に包まれたセタカムイ岩です。

伝説に満ちた沿岸各地の景勝地の中で、古平の美観を彩る奇岩です。

■セタカムイ伝説二話

当時、古平高校三年・佐々木淑子さんの『伝説・セタカムイとローソク岩』からご紹介しましょう。

「北海道積丹半島の根元にある古平地方は、近來、鯨漁が皆無

のため次第にほかの漁業や観光地としての努力をしています。景観はその規模の雄大さと眺望の奇観を誇り、またその中に数多くの伝説があります。その一つセタカムイ伝説について紹介します。

入り江深き余市、古平間に陸地から約三百メートルの海上に、すつくと細長いローソクのような岩があります。そうです。ローソク岩と呼ばれている高さ三十メートル程の岩です。

また、そこから少し古平寄りの沖町の海岸に、海に向かって犬が遠ばえデモしているかのような岩があります。

むかし、この辺りには百数十人のアイヌの集落からなっていたそうです。

ある日のこと。いつものように村の若者たちは小舟をあやつ

り沖へ漁に出かけました。大変穏やかな鏡のようなうみで、空はどこまでも青く晴れ渡った朝でした。

漁もいつもより好漁で、時間の経つのも忘れ、いつの間にか辺りは暗くなりかけていました。すると、急に水平線から黒雲がわき上がり、風も出て、波が立ち始めたと思うと激しい雷雨が襲ってきました。

小舟は獲った魚も捨て、身軽になつて風波とたたかいました。が、自然の猛威にはかないません。この若者はやがて力尽き、舟も哀れ海底の藻くずと消えてしまったのです。

一方、陸では部落総出で浜にかがり火をたき、今か今かと舟の帰りを待ちました。その中には一頭のアイヌ犬も混じつて、主人の帰りを待っていたのです。

しかし、暴風雨は衰えるどころかますます荒れ狂うばかりでした。

一瞬、雷鳴がとどろくと、突然、陸続きであつた岬が大音響と共に崩れ落ち、すつくと松明（たいまつ）のような形の岩ができ、

しかもその先端には明々と火が燃えているではありませんか。

この岩はその後風化作用により、現在見るローソクのような形になったのです。

こうして、アイヌ犬の主人はついに帰ることはありませんでした。

この犬は帰らぬ主人を待ち続け、低く、そして遠く、いつまでもいつまでも吠え続けています。

大きな池よ

お前はなぜそう動くのか
その運動もう止めてくれ
ほんの少しでいいのだ
舟が戻るまで

いや主人が見えるまでもいい
静まれ

そんな白い歯をむき出さず……
大きな息

君はなぜそんなに早く走るのだ
助けてくれ

沖にいる主人をだ
大きな息よ 風よ
そうなるな
主人を帰してくれ

こうして吠え続けたまま岩と化し、神となり、天の主人の許へと行ったのです。

この岩はセタ（犬）・カムイ（神）と名づけられ、今なお悲しげに、帰らぬ主人を慕い、海に向かって呼んでいるかのようです。

そして、近くにあるローソク岩もこの物語を告げようとするかのように神々しくそびえ立っています。なお、このローソク岩は、暴風雨になり海が荒れるとその先端に火が見えると、漁師の人たちの間に言い伝えがあるそうです。

（北海道古平高等学校生徒会誌『白鳥古丹』第二号・昭和三十六年三月）

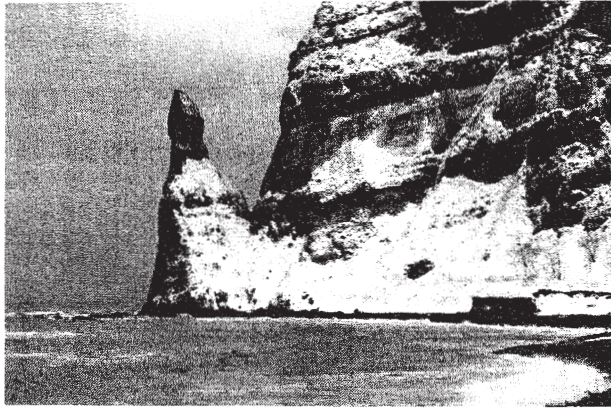
× × ×

むかし、ラルマキ（沖町の旧地名）に一人の酋長（うぢやう）が住んでいた。ここを流れる川にはサケ・マス・アメマス・ヤマメなど沢山の魚がいた。酋長は川でこれらの魚をとり、山では獣をとって食料としていた。

ある日のこと。この酋長が川に魚をとりに行くとき、見かけたことのない魚がいて、早速これを

突き刺し、ほかの魚といっしょに持ち帰った。

家に帰ると、炉のたき火でこれを焼き始めた。炉のそばでは一匹のミケ猫がうずくまって、魚を焼く匂いに鼻をうごめかしていた。土間には一頭のアイヌ△初冬のセタカムイ岩▽



犬がいて、これももの欲しそうに魚の焼くのを見ていた。

酋長は、何度か何度も串を返しながら魚が焼き上がるとさるに並べ、また魚を串に刺しては焼いていた。

そのうち、今までじつとして

いたミケ猫が周りをうろつきだし、それにつられて犬も右往左往しだした。酋長が「しいつ、しいつ！」と追うが、焼けた魚の周りから離れようとしなない。

突然、猫が一匹の魚をくわえると人口めがけて走り出した。犬はそれを追って外に走り出して行った。猫はあの珍しい魚をくわえて行ったのだった。

酋長は「ミ毛猫め、あの魚を狙っていたのか。帰って来たらとつちめてやる。」などと一人ごとを言いながら、焼きおえた魚を干すのだった。

一方、猫を追って出た犬のシロの方は、どこまでも猫を追いつけ続けた。猫は逃げて岬の下まで来たがもう先はない。すると今度は切り立ったような崖に登り始めた。あえぎながら必死に登っていたが、口にくわえた魚だけは放さなかった。

犬のシロは、崖下まで追って来てさかんにほえていたが、崖をよじ登って逃げる猫を見ると歯をむき出し、かつとにらみつけると、負けじと後足をふんばりながら崖を登り始めた。

しかし、猫の身軽さにはとう

ていかないうちにもなく、あきらめて降りようとし、ようやく頭を下に向きを変えたが、前足が思うように動かず、じりじりするばかりだった。

やがて夕暮れになったが少しも動いてはいなかった。ときどき悲しげに声をだしては前足を動かそうとするのだが、一向に動けなかった。日がとつぷりと暮れてもシロの姿はまだ崖の腹にじつとしていたのである。

朝日が上り始めても、犬のシロの姿は元のところから動いていなかった。こうして、何日も悲しい声を出しながら下りようとがんばっていたが、ついに力尽きその場で果ててしまった。

やがて夕日が沈み、翌朝のこと。見るとあの場所には不思議にもシロの姿が無く、今までなかった岩が忽然と現れていて、その付近の様子は一変していた。部落の人たちはあのシロの変身だと言い、その話から後にこれを『セタカムイ』と呼ぶようになったという。

※ 本紙「せたかむい」の名称は、伝説による『セタカムイ』から命名したものです。

稲倉石採石所訪問記

全てが大自然に還っていた

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)



去る六月五日。古平町の教育

委員会が「生きがい学級研修」

として、稲倉石鉱山跡を訪ねた

との事をお聞きしました。

その感想は、当時の面影が全

く消え失せ、参加された元社員

の方ですら余りの変わりように

驚いていたという事でした。

実は、来年の夏に、稲倉石鉱

山の社員や関係者が古平に集ま

り、往時を偲び懇談しようとの

計画を樹て、その準備のために

七月の末に古平を訪れ、私が働

いていた稲倉石鉱山をこの目で

確かめる事が出来ました。

バス停の旧「ヤブチョウ」さ

んの前から、山に向って一直線

に伸びる九九八号線を走ったの

ですが、町を過ぎた途端に道の

広さと舗装が目についた。

当時は、トラック一台がやつ

との狭く曲がりくねった砂利道

だったのに、人家が全くない稲

倉石まで整備されていた。

いよいよ稲倉石に着いたので

すが、小中学校の校舎とグラン

ド跡は採石置場となり、裏山の

山容だけが変わらぬ姿で私を迎

えてくれた。

学校前から鉱山までの道路の

両側には、当時、六〇〇人余が

生活し一二〇戸余の社宅があつ

たのに、鬱蒼と茂った丈余の草

木がすべてを隠し、廃山という

現実の姿を見せつけた。

草とが絡み合い、僅かに往時を
偲ばせてくれたのは

・神社に通じる細い参道と、手

を清めた「洗心石」

・事務所を支えた土台石垣

・選鉱場の基礎コンクリート

・永久の眠りを示す、閉鎖され

た坑口

だけだった。

標高八〇〇メートル余の稲倉

石山の裾野に天が与えてくれた

豊富な鉱物資源を、優れた鉱山

技術を駆使した鐵興社と、鉄腕

の鉱夫さんの手によって発掘さ

れ、長年にわたって働く人々の

生活を支えてくれたのです。

今、目の前

にある四囲の

山々は、東洋

一のマンガ

ンと讃えら

れた過去の栄

光を抱きしめ

ながら、千古

の自然に喜ん

で還ったかの

ようでした。

でも、沢を

渡る風の音が

何時しかあの頃の子供達のザワ

メキに聞こえ、白い雲の流れが

選鉱場が吐き出していた煙突の

煙に見え、センチになるまいと

耐えていた私に、哀愁を感じさ

せ、しばし足を止めさせた。

すべてをこの目で確かめ、胸

に刻み、稲倉石を後にしようと

したその時、草むらの中から可

愛い「北キツネ」の子が私にま

とわりつくように寄りつき、別

れを惜しんでくれた。

これは偶然なのか。否、稲倉

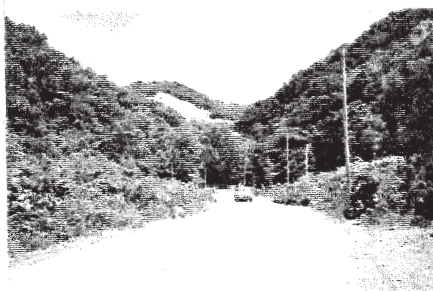
石という名の大地の使者に違ひ

ない。そんな思いを土産に、振

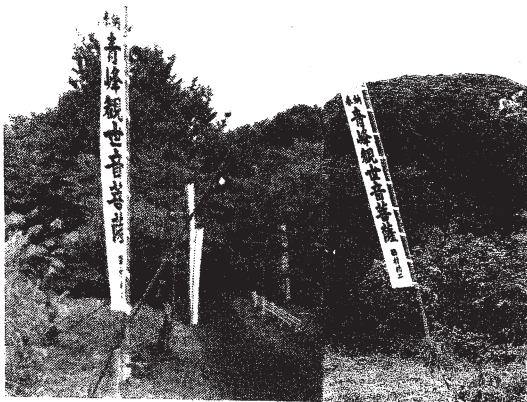
り向きもせず稲倉石を去った

三十五年前の稲倉石

↓ 現在の稲倉石



丸山山麓に立つのぼり →
読経に参列の信者たち ↓



丸山青峯観音例祭



ふるさとのアルバム

拝殿正面 →
ご馳走の並ぶ楽しい会食と
大忙し賄いの裏方さん ↓



大正一二年、漁家の人たちから深い信仰のあつた青峯観音のお堂が新築され、信者によつて春・秋の例祭が行われてきました。
今年も九月一六日・一七日の例祭には多くの信者が参列し、今では古平でも数少なくなつた地域の伝統を守る晴れやかなお祭でした。



中 戦

泣き笑いの 樺太漁場体験談

戦 後 4

吉 野 慶 一 郎

●ナマコ漁

ウニの外にナマコも沢山いたが、ロシヤ人はこれも食べないので採る人もいなかった。古平から持って行った八尺(はっしやう)を引くと、それこそ拾い集めるように沢山とれた。

ナマコを樽などに入れておくと、自然に透明で細長い腸を出す。これを塩辛にしたものがこのわただが、普通はこの腸のこともこのわたと言っている。

このわたを造るには、ナマコをしぼるようにしてこの腸を取り出し、塩を加えてゆつくりと毎日のようにかき回す。やがて黄色味を帯びてくるが、そうなるとうれいである。昔から製品は貴重品として扱われる。

体の方は塩蔵するか、煮たものを干して製品にする。煮て干したものがいりこ(海參)とい

われ中国向けに輸出されて、中国料理の重要な食材になる。

●戦場は遠かった

昭和一二年に日中戦争が、昭和一六年には大東亜戦争(後の太平洋戦争)が起きて、全国的に次第に生活物資も不足してきたが、樺太ではまだまだ物資にも余裕があり、一般の生活にも差し迫った緊張感はなかった。

衣料品がキップ制になった(昭和一六年には米が配給制翌一七年には衣料品が点数のキップ制)、樺太ではそれ程厳密ではなかった。衣料品なども割と豊富だったので、衣料品を買うのに点数が足りなくてもオマケをしてくれた。その頃、古平から来ていた女工さんたちは、方々の衣料品店を廻っては、点数をオマケしてもらってはいろいろと買い物をしていた。

酒も配給制だったが、一升買に行っても「お願いします」と言うとき余分に買いたし、或る程度は自由でもあった。船が沖から戻る頃にはいつも酒を用意していて、切り揚げのときなどは余程買っておいた。古平から来ていた人たちの中には、瀬樽(せそう)網や縄の浮きに使う樽の中に酒を詰めて持って帰る人もいた。

●野菜類は豊富

樺太は夏の涼しい気候が幸いしたのか、野菜類の中でも白菜・大根・キャベツ・じゃがいもなどは北海道よりもりっぱなものにとれたが、きゅうり・なす・トマトのような実のなるものはだめだった。また、リンゴなどのような果樹も育たないので、果実類は貴重だった。しかし、内地とは船便がひんばんだったので一般の物資もそれほど自由なことにはなかった。

●うれしい酒の無税

樺太は外地扱いということなので、酒税がかからないのでその分酒も安かった。塩も内地は専売だが樺太では塩業会社というものがあって、内地では塩も不自

由なときでも、ここでは貨車で買うこともできた。漁業をしていると、塩はとにかく無くてはならないものであった。

●議会の無い樺太庁

樺太では北海道と地方制度が異なっているため、選挙による道会議員のような制度はなく、官選による評議員の評議員会によって行われている。

評議員に選ばれるのはいわゆる地方の名士たちで、当時、私のいた野田町の南、広地町の漁業組合長をしていた本間正蔵さん(亡くなられた本間作一さんのお父さん)も評議員だった。同じ広地町に、玉栄丸の堀玉太郎さんという漁業をしていた。市町村では内地と同じで、それぞれ選挙による議員がいて議会による自治が行われている。

●平穏だった樺太が――

戦時中の樺太は、戦場から遠く離れていたということもあり、内地に比べて物資も割と豊富にあり、戦争という緊張感はありませんでした。

それがソ連参戦により、一転して戦場と化してしまったのである。

短歌

吉平町岬短歌会

針のうごく雲丹より採りし実を口に入れてもらふ子らに
囲まれて

ヨサコイソーランテレビに夜まで映る見て疲れいつしか
ついに眠りき

早朝の海辺にひびくエンジンは船小さくとも音の大きく
声高く波打ち際に鳴くカモメ朝の挨拶しているやうな

田 中 香 苗

梅雨明けて空高くすみ日ざしよき空に喜々とし野鳥らの飛ぶ
病める身をベットのの上に横たへて快癒する日をひたすらに
待つ

竹 内 コ ト



吉平ホトトギス会

空蟬を孫の土産に二ツほど 斉藤 波留

象潟きさや肥えしハタハタ御馳走に 山口 悦子

コスモスのかすかな風に首をふる 越野 敏雄

団体の客に出合へる虫の宿 大和田 絵伊

犬を引く追いかけてくる赤トンボ 関口 勝志

気になりし家のめぐりの雑草を君は丹念に抜きくれしとふ

奥 山 きよみ

携へて来し槌をもて石を割り金含有量の見方話さるる

鈴 木 時 子

帰りのバスの中にてひとの運動会終へし余韻にひたりて
ゐるも

堀 典 子

往年の稲倉石鉾山隆盛を聞きつつ山ゆく深緑のなか

丹 後 初 江

.....

手造りの梅酒廻りし宴かな 越野 清治

借景の葛蔓居間の窓にまで 仲谷比呂古

鮭の竿河口に百の揃ひけり 泉 清三

福井幸平 五句

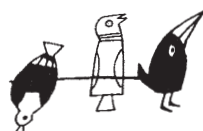
菊花展ずらりと出でし新種かな

チョンチョンと我れゆく先を石たたき

きのこ汁お目にかかれず終るかも

きのこ採り気力も弱くなりにつけり

選別のお返しにとし秋扇



古平町史年表

— 5 —

145～132年前

145年前 — 安政4年(1857)

- ◆老中阿部伊勢守の家臣石川和助(頼山陽の高弟)が西蝦夷地を巡察し、報告書の中に「フルビラ詰役人栗山某フルビラ、ピクニ、シヤコタン三場所を治め」とある。
- ◆古平・小樽内場所請負人恵比須屋半兵衛が、余市から岩内境までの道路を開くのに協力し、また余市・古平間の山道の一部も開く。
- ◆余市の林長左衛門が古平に通じる道路2里余りを開く。

144年前 — 安政5年(1858)

- ◆古平での越年が許可され、永住できるようになる。
- ◆港町の田附源吉が、古平で和人として最初に誕生する。

140年前 — 文久2年(1862)

- ◆天山によって法興山禪源寺が新地町に創建される。

136年前 — 慶応2年(1866)

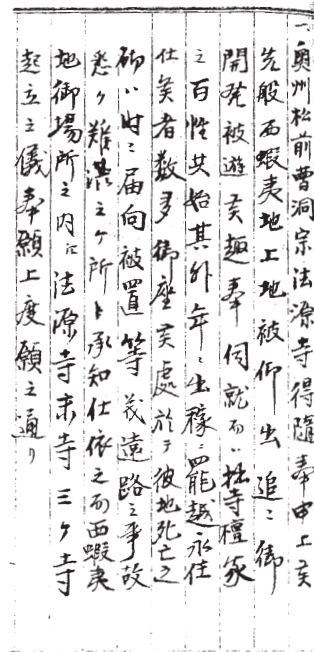
- ◆漁場請負制度の廃止により、11代目岡田八十治が、種田徳之丞ほか2名に古平場所を譲渡する。

133年前 — 明治2年(1869)

- ◆蝦夷地を北海道と改称、古平は古平郡となる。古平町では、明治2年を【古平町開町の年】としている。
- ◆蝦夷地名を調べた本に「古平郡振平(フルビラ)は南ピクニ領、北ヨイチ領で、チャラシナイまで海岸二里十五町(約5.6和)ある。アイヌ名がフウルヒラで、フウルは赤い、ヒラは平の所、赤平という意味であろう」と書いてある。
- ◆ラルマキの地名を御木村(現在の沖町)と改正する。
- ◆元運上屋を古平本陣とし、歌楽村・群来村・沖村・入船町の番屋を脇本陣とする。
- ◆場所請負制度が廃止になったが、この年は種田徳之丞が請負人となる。

132年前 — 明治3年(1870)

- ◆古平本陣に開拓使古平出張所が置かれ、
- ◆石澤天樹が借家を東本願寺管刹所とし、翌四年、新地町に仮本堂・庫裏を建てる。明治14年、宝海寺と公称する。
- ◆札幌に開拓使庁舎が出来るまで、銭函に置かれていた仮役所が廃止になり、小樽仮役所が置かれる。



↑ 開拓使古平出張所
越年免除書
開拓使古平出張所焼印